

初夏の風が運ぶ思い出の香り

津久井 修司

部屋探し

住んでいたマンションは、家族の人が暮らすには少し手狭なので、もう少し広い部屋探しを始めたのが、2007年4月中旬頃のことであった。

それにしても、今はなんと便利なのだろう。物件が写真つきでネット検索できる。地域、家賃、間取りなどを指定すればその該当物件があつという間に多数表示され、気に入った物件があればメールで予約が取れる。忙しい人や仕事を持っていての人にとっては大変便利である。21年前（一九九二年）、仕事の関係で引

越し先を探した時の苦労を思うと雲泥の差である。

娘が探した物件を、家族四人（家内・娘・長男）で下見したのは、2007年5月上旬頃のことであった。予約を取って指定された敷地内に入り、車から降りると、初夏のさわやかな風に乗って運ばれたとても「良い香り」が私たちを迎えてくれた。「あー何と気持ちの良い香りだろう」と思わず口ずさむと、家内子供達も頷いていた。不動産担当の方に案内されて部屋の中に入ると、その香りが更に強くなってきた。

真夏の訪問

「発車オーライ」明るく元気な車掌さんが、揺られながら切符をてきぱきとさばっていた。「すごいな、こんなに

揺れているのに車掌さんは倒れないんだ・・」道路もバスの乗り心地も悪いのに、バスの揺れにあわせて巧みにバランスを取りながら、切符を売りさばっている姿は、子供心にとてもまぶしかった。「こ乗車ありがとうございました」きれいな車掌さんのさわやかな声に送られて、私達家族8人は、母方の実家近くで下車した。目的は毎年恒例の夏の訪問（お盆）であった。

母方の実家に着くと、伯父夫婦が笑顔で待っていた。「暑いですね・・」と汗をふきながらいつもこんな挨拶から始まっていた。一年ぶりの訪問にお互い喜んでいようであった。子供達も挨拶をしてしばらくそこに同席すると、大人たちの会話に飽きた私は兄弟と共に、伯父宅の裏庭に向かった。そこには小川が流れていたのである。「どうして、こんなところに小川が流れているのだろうか・・？」と、ひんやりと冷たい水を小さな手ですくいながら不思議に思った。

その建物は高尾駅直近で、主な部屋

は南を向いて日当たりも良くすこし易そうであった。しかし、私は先ほどから、あの「良い香り」が気になっていた。部屋に入り、暖かな日差しを受けた南側のガラス戸を開けたとたん、あの「良い香り」を包んだ風が勢いよくすうーっと入ってきた。「あつ、香りはこつちから来ているんだ！」と思わず私は叫んだ。

5階にあるそのベランダから外を見ると、右側には高尾山をはじめ多くの小高い山々が連なっている。また、お寺や霊園も少し離れたところにあり、あの「良い香り」はどうもそのあたりから運ばれてくるようだ・・と思った。香りに包まれてそんな事を考えている内に、思いは遠く子供の頃へ飛んでいった。

この家族旅行は、私にとつては普段

経験できない事を体験するちよつとした冒険でした。家族みんなでバスに乗り、例え同じ市内であっても、子供にとつてはとても遠く感じられた親戚の家へ出かけるという冒険心と、少し緊張が入り混じった複雑な子供心であった。私が楽しみにしていた事の1つは、何よりも伯父さんからお小遣いをもらえる事であり、100円ぐらいであったが、あの頃の子供にとつては大金でした。

お互いの挨拶や近況報告が終わると、決まって次は近くのお寺へ墓参りに行く事であり、既に多くの人が訪れ、あちらこちらで線香の煙が漂っていた。男達は墓をきれいに洗い、女達は花をそろえていた。その煙の中で、両親の満足した様子の笑顔は、なんともいえない安堵感を子供心に抱かせた。

香りの正体

「ここがいいわねえ」遠い昔の思い

出の中にいた私の耳に、みんなの弾んだ声が隣の部屋から響いてきた。香ばしい香りに包まれていた私は、あれからもう20年以上もの時の流れが、あつという間に過ぎ去っていったその速さに驚きながら、思い出の香りをそつと胸にしまうと、声のするほうへ足を運んだ。その後、こちらへ引越ししてきたのは、その年の9月のことであった。

それからしばらく生活してみて気づいた事は、あの香ばしい香りは、近くの霊園やお寺から運ばれてくるのではなく、お隣の奥さんが炊かれる「お香」だったのである。借用の期間、わたしはいつもこの上品で香ばしい香りに包まれていた。